

# ひろせ いちろう 広瀬一郎

(スポーツ総合研究所所長、多摩大学教授)

## 『スポーツマンシップ立国論』



—— スポーツマンシップへの理解不足を強調されていますね。

■日本では70歳代以上の人くらいしか肌身で理解していないかもしれせん。学校教育で「争う」「競う」という考えを排除してから、スポーツマンシップが私たちの常識や共通認識でなくなつていった。例えば選手宣誓で「スポーツマン精神にのっとり」と中高生が口にしても、残念ながら彼らは本当の意味を分かっていない。指導者が教えていないのです。

—— 確かにそうかもしれません。◆どんなスポーツにも、簡単には勝てないようにする仕掛けや条件設定がある。それを乗り越えて勝利することが大きな喜びなのです。まず、そんな困難に立ち向かうのだという覚悟を持つことがスポーツマンシップの出発点と言えます。だからルールを守り、審判の判定に従うのは、スポーツマンには疑問の余地のないことです。

—— 覚悟と同時に相手を尊重(リス

ペクト)することも説いています。

■まず相手がいなければ競技になりません。そして立場が異なる者、異質な者を理解し、その価値を認めること、つまり尊重の精神がなければスポーツが世界に広がって、多くの人の共感を呼ぶこともなかったはず。—— とはいえ、スポーツマンシップで国を立て直すのはどうでしょう？

■スポーツを生んだ英国には「健全な国家・社会を築くため、健全で堅固な

## スポーツで覚悟と尊重の心 養えば人と社会は強くなる

人間を育成する」との明確な戦略がありました。植民地経営という国家目標を見据え、スポーツを国づくりに活用したのは歴史的な事実です。

スポーツを通じて困難に立ち向かう覚悟を養い、異質を尊重する精神を育てることが人を強くし、社会を強くします。そういう視点でこの国を見ると、いじめや自殺の多さは、同質性はかり

を追求してきたせいではないかと思えてきます。

—— 教育が重要なカギですね。

■先日、大学の授業で「年収3000万円を保障するから5年間インドで働けと言われ、行く者は手を挙げなさい」と尋ねました。36人の学生がいて、たった1人でした。米国や英国の学生なら、絶対に全員が手を挙げるはず。欲しいもの、つまり「欠落感」が日本の若者にはないんです。こんな国で欠落感を教え、目標のために努力したり、勝利のために困難に立ち向かったりする精神を育てるのはスポーツくらいしかありません。

—— 本のなかで紹介している柏原竜二選手(大学駅伝)や石川遼選手(プロゴルファー)らは例外でしょうか。



■今、国会議員の間でスポーツの基本法を作る動きがあります。スポーツ振興や競技団体のため

の基本法ならやめた方がいいと思う。

日本はスポーツを通じてこんな人材を育てます、ということを世界に宣言するものでなくては意味がありません。日本国憲法ともしつかり関連つけた立法精神を前文にうたい、スポーツマンシップを再定義してほしい。スポーツには可能性と力があるので。 (聞き手 中村秀明・毎日新聞編集局)

# 新刊

## 『目でわかる中国進出企業地図』

著者 清野 稲垣 著者 1995円

著者が2002年から執筆している「進出企業シリーズ」の最新版。特徴は、中国の内需が有望な19業種について、その市場特徴、主要プレイヤー(市場参加者)の進出場所をビジュアルに描いたことである。そのプレイヤーは日系企業を中心としているが、欧米グローバル企業や韓国、台湾そして中国企業も網羅しているところに本書の価値がある。図表も豊富で、手元に1冊置いておきたい。

## 『回想の都留重人』

尾高煙之助、西沢 保編 助書費、3675円

2006年に93歳で死去した経済学者の関係者による証言集。シュンペーター、スワイジー夫妻、サムエルソンら米経済学の泰斗との交流、戦後日本建設での尽力、一橋大学学長時代の貢献などのエピソードも面白いが、ロナルド・ドーア、小宮隆太郎、鶴見俊輔各氏の話は拔群だ。都留が主張した「命の豊かさを大切にす資本主義」は今こそ見直されるべきだろう。

## 『官僚のレトリック』

原 英史著 新潮社、1470円

安倍、福田内閣で渡辺喜美行政改革担当相補佐官として公務員制度改革にかかわった元官僚が詭弁、議論すり替えを得意とする官僚の特質を暴露。官僚制度を本当に改革するためには人事院と身分保障を廃止するしかない主張。国民は能力のある政治家を選び、政治家は使える官僚を選ぶべし、とい